

老舍研究会会報 第9号

胡絮青女士 題字

第四次老舍 學術討論会について

杉野 元子

3月21日から25日まで、重慶の重慶出版社のビルを会場にして、第4次老舍學術討論会が開かれた。中国国内からは、舒乙氏ら66名(その内重慶出版社関係者は13名)が参加し、国外からは、柴垣芳太郎、小林康則、平松圭子、布施直子氏と私の計5名の日本人が参加した。

私は19日に北京をたち汽車で重慶へ向かったのだが、その車中で思いがけず舒乙氏や曾広燦氏らの中国人研究者数人と顔を合わせた。また、討論会終了後の25日には40数名の中国人研究者とともに1泊の大足旅行へ行き、27日帰途についた際には20数名の中国人研究者とともに2泊3日の武漢までの三峡下りの船旅を楽しんだ。上海経由で来られた他の4名の日本人の先生方は、飛行機の都合で開幕式の前に重慶に到着することができず、また大足へも中国側より1日早い24日に出発なされたため、日本人としては私だけが討論会の期間中はもとより、その前後にまで渡って、中国人研究者と実に長い時間を過ごすことになったのである。以上のような経過から今回の老舍學術討論会のあらましについて私が参加報告記を書くことになった。

〈論文巡礼〉

21日の午後、“論文巡礼”が行われた。“論文巡礼”とは論文を用意してきた人がその要旨を10分ほどの持ち時間で次々と発表してまわるやり方をいう。前回までの討論会では論文を全文読み上げていたそうだが、今回は自由討論に時間をたっぷりさくため、このようなやり方を採用したそうである。過去の討論会に参加したことのある方々に今回のやり方と前回までのやり方のどちらがよ

かったか感想をうかがってみたが、大半の研究者が今回のやり方を支持した。今回提出された論文の題名と執筆者の名前は、以下の通りである。

「论老舍的爱国主义——纪念老舍诞辰九十周年」

史承钧(上海师范大学)

「老舍与中国左翼文学」 石兴泽(聊城师范学院)

「老舍与“京味派”文学」 王献忠(天津师范大学)

「浅谈老舍的幽默观及其幽默手法」 王延瑜(山东大学)

「试论老舍早期的文化意识——兼析老舍早期三部长篇小说」 沈渝丽(烟台大学)

「从《“火”车》谈到老舍的象征方式」 范亦毫(天津对外贸易学院)

「论老舍的幽默观——《老舍幽默论》之第二章」 刘诚言(襄阳师范专科学校)

「半开的樊笼——从老舍《离婚》到谶容《懒得离婚》」 吴小美 魏韶华(兰州大学)

「老舍的小说观——老舍小说研究」 王惠云(河北师范学院)

「国民灵魂与人生模式——阿Q与祥子」 王晓琴(北京师范大学)

「冷静、理智的文化审视——深沉、浩瀚的民族反省评《四世同堂》」 杨国祥(江苏镇江师范专科学校)

「面对殉道者的沉思和困惑——兼议中国知识者的两难境地」 刘懿信(山东大学研究生)

「论老舍的文化心理结构——兼谈老舍与中国知识分子」 谢昭新(安徽师范大学)

「真切感人的风骨篇——读老舍生活与创作自述随想」 (论文提要) 万平近(福建社会科学院)

〈自由討論〉

テーマを決めず参加者が自分の考えていることを自由に語りあおうという司会者のかけ声で22日と23日の2日間にわたる自由討論は始まったのだが、北京語言学院の李潤新氏が1989年1月29日の「文芸報」に掲載された王行之氏の文章「我論老舍」に対する反論を述べたのがきっかけとなり、

老舎が解放後に歩んだ道についてどう評価すべきかということに議論が集中した。王氏はこの文章の中でまず文芸は必ず政治に奉仕しなければならないという観点を捨てて新たに老舎文学を評価し直す必要性を訴え、「作家老舎の輝き、魅力はそもそもほとんどが前期にあった」と解放前の老舎を高く評価し、解放後の老舎については「彼は、指導者たちを信任、崇拜し、自ら進んで彼らの指導に従い、彼らを宣伝し、ほめたたえる一方で、非常に貴い独立した批判精神と作家としての歴史的責任感を軽々しく消滅あるいは異質化させてしまった」そして「狂気と万歳の声の中で自己の創作の歩みをどどん転落（大滑坡）させていった」という大きなマイナス評価を下したのである。この王氏の意見に対して李氏は、解放後の老舎は『茶館』という名作を書いているし、他の戯曲も言語芸術の面では解放前の作品よりすぐれている、けっして“大滑坡”ではなかったと反論した。この問題については活発な討議がおこなわれ興味深かったが、王行之氏が秘書組の責任者だったため、雑用に追い回され、ゆっくりと討論に参加できなかったことが惜しまれる。中国社会科学院の趙園氏と関紀新氏が、今まで傑作との評判が高かった『正紅旗下』に対し、前半部分は確かに素晴らしいが、後半部分は軽佻浮薄におちいっており、あのまま書き続けたとしても傑作となったかは、はなはだ疑わしいという意見を述べた事も興味を引いた。曾広燦氏の『老舎研究縦覧』とこの会報に書かれた過去3回の討論会に関する文章を管見する限りでは、前回までの討論会では、不当に低く評価されてきた老舎文学をもっと正当に高く評価するという点に重点がおかれていたようだが、今回の討論会では老舎の欠点、過ちと失敗作についても討論された。なお自由討論の時間に平松圭子氏が日本における老舎研究の成果として、昨年刊行を見た中山時子氏編『老舎事典』を参加者の前に披露し、内容の紹介をなさった。

〈舒乙氏の談話〉

23日の自由討論の時間に舒乙氏が2時間近く話をされた。台湾に老舎の甥がいて老舎について研究を行っているといった国外における老舎研究の状況と、解放後の老舎と周恩来、沈從文、茅盾、郭沫若、曹禺、田漢、胡風、馮雪峰、丁玲などとの関係について話された。また北京語言学院の教員の方が、イギリスで老舎が住んだ家の場所と『二馬』に登場する地名と建物を調査し、その結果『二馬』の中の地名や建物は馬父子の骨董店をのぞいてすべて実在していたことがわかったという

こと、そしてその方がこの調査内容を論文にまとめたのでいずれ発表されるということが紹介された。イギリス時代の老舎については、資料が乏しくこれまであまり論じられることがなかったが、このような調査研究は老舎の国外での足跡を知るための貴重なものであり、一日も早い論文の発表が待ち望まれる。

〈北碚〉

24日夜参加者は火鍋をつつきながら、有志による歌や踊りを楽しみ（舒乙氏は、ロシア語の歌を披露した）、討論会が和気あいあいとした雰囲気の中で幕を閉じた。翌日の25日朝参加者は老舎の故居がある北碚へ出発した。北碚では老舎が北碚に住んでいたころ老舎と親交があった馮玉斎という老人の方から老舎にまつわるお話をうかがう機会があった。馮氏は1939年に北碚に来て以来50年間ずっとそこに住んでいるそうである。老舎は北碚にいたころ、馬宗融、王庚揺、そして馮氏が開いていたお茶を売る店をよく訪れたそうである。馮氏は『茶館』に登場する秦二爺は、王庚揺をモデルに、茶館の名前“裕泰”は、自分の店の名前“裕大”をヒントにしたのではないかと断言された。また『老張的哲学』の中の老張は老舎の先生であった李後巖という人をモデルにしているということも李後巖の子供から聞いたことがあると語っておられた。しかし私たち一行は大足に向かう途中に北碚に寄ったため昼食後すぐに出発しなければならなかった。ゆっくりとお話をうかがうことができず残念だった。

〈大足〉

北碚で老舎故居（現在も人が住んでいるため内部は参観できなかった。）を見学し昼食をとったあと、石刻芸術で有名な大足へ向かった。大足旅行は自費で20元負担するオプションツアーだったが地元重慶以外の人ほとんど全員参加した。大足の町は、重慶の町もそうであったが、個人営業の店が多く、夜遅くまで店が開いていて、活気があった。また期待していた茶館はあまりみられず、火鍋料理の食堂が立ち並んでいた。中国人しか泊れない大足機関招待所に私も泊めてもらい、翌朝石刻見物に出かけた。出発前今日は観音菩薩の誕生日にあたるため、縁日が立ち並び、近隣の村々から人が集ってにぎわいを呈するので、ちょうどこの日に大足に来たのは幸運だったといわれたのだが、これが裏目ででてしまい、2大観光地のうち北山へは行けたのだが、宝頂山へはバスが数珠つなぎになっていて道が大渋滞、結局途中であきらめ重慶へ引き返した。

〈中国の学会〉

今回初めて中国の学会に参加し、日本とは非常に異なった学会の運営方法に驚きととまどいを感じた。討論会への参加者の大半は大学の教員であるが、中国における教員の待遇は非常に悪くとても自費では国内を旅行をする余裕がない。したがって討論会に参加するということは、学术交流が第一の目当てであるが、そのついでに公費で国内旅行を楽しむという側面もある。参加者には重慶に到着したとき、重慶と長江下りの地図、重慶と大足のガイドブック、20個ほどのオレンジが配られた。また帰日には、おみやげとして重慶名物のザーサイや怪味豆等の食べ物と帰路の船や汽車の中で食べるための“方便面”が配られた。参加者は資料代の名目で30元を払うが、それ以外の費用は主催者側と参加者各自の所属機関の負担でまかなわれる。主催者側は会場、車、裏方に回って働く人員を提供する、重慶までの往復の交通費や宿泊費は参加者の所属機関が負担する。食費に関しては1日9元かかるうち5元を主催者が、4元を参加者の所属機関が負担する、という具合だ。このため主催者側の経費の負担が相当重くなる。今回は11の機関が合同で主催したが、その中でも不景気な出版界の中でめずらしく経営がうまくいっており、オフィスと宿泊所と会議場を兼ねた大きなビルをもっている重慶出版社が主催者に加わってくれたことでようやく開催が可能になったようだ。研究者側は自分の所属機関に予算の余裕があれば参加できるが、もしそうでなければ今回の宋永毅氏のように素晴らしい老舎研究の業績をもち、本人も参加を希望していたにもかかわらず、所属機関が業余大学のため予算に余裕がなく参加できなかったという事態が起きる。討論会期間中に、食べきれないほどのフルコースの料理を楽しんでいた参加者が、帰りの船の中では自費負担となるため、朝はパン、昼と夜は“方便面”ですましていた姿を目の当たりにし、中国の知識人のおかれた厳しい状況をあらためて強く認識した。

〈終わりに〉

現在中国の出版界は非常に不景気なため学術書の出版は困難をきわめるようだ。今回の参加者の中には自分で書きためた原稿を持参し、舒乙氏や重慶出版社の人に読んでもらい何とかして出版元を探そうとしていた人が数人いた。しかしこのような状況にもかかわらず、去年宋永毅氏が『老舎与中国文化観念』という研究書を出版したのに続いて、今年は劉誠言氏が『老舎幽默論』という研究書を、王行之氏が老舎の評伝を出版するそうで

ある。日本でも去年中山時子氏編『老舎事典』が出版された。老舎の名誉回復後10年以上が過ぎ、研究書出版の動きは今後ますます盛んになるであろう。

日本の学会と違い中国の学会は開催期間が長い。そして研究者が同じ所に泊まり、3度の食事をともにし、市内観光や泊まりがけの旅行にも団体で行動するため、研究者同士の交流する時間がふんだんにある。私は学生の気安さから主催者の方からお願いして、学会期間中泊まる場所以外はすべて中国人研究者と行動をともにさせていただいた。2日間は中国人研究者と一緒に重慶出版社の宿泊所に泊めていただいたりもした。そのため学会の期間を通して、まことに数多くの中国人研究者と知り合い、1対1でゆっくりお話を伺い、中国の研究者や研究の動向をめぐるさまざまな情報や実情などを知ることができた。このかん中国人の中に外国人が混じって行動することにより面倒が生じることが多々あったであろうが、快く私の希望を聞き入れ、たいへん親切にしてくださった重慶出版社の方々や、秘書組の担当者の方々へ、この場を借りて心より感謝を述べたい。

第四次全国老舎 学術討論会参加記録

日 時 1989年3月21日～25日
会 場 重慶出版社招待所
主催団体 中国老舎研究会 重慶文聯 作家協会重慶分会 西南師範学院 重慶師範学院
参加日程

3月18日(土) 大阪より上海へ。

19日(日) 上海より成都へ。空港で成都へ帰る四川少年兒童出版社社長の韓樑(女性)と知り合う。同出版社より出版した〈図書館小叢書〉(全部で120冊)の中の一冊は、〈老舎幽默詩文集〉(舒濟編)であり、のち成都の同出版社を訪問したおり、同書をいただいた。

20日(月) 杜甫草堂、武侯祠、蜀繅研究所を見学。夜、夜行特急で重慶へ。

21日(火) 朝9時過ぎに、重慶駅に到着。南開大学の曾先生の出迎えをうける。急ぎ会場の重慶出版社に向かう。第四次全国老舎学術討論会開幕式に出席。

挨拶 方敬氏・柴垣芳太郎氏・重慶出版社(挨拶の途中から出席したのでした)。祝電披露(巴金、吳祖光、曹遇の

各氏)。メッセージ(劉再復、胡絮青
兩氏)。録音テープメッセージ(吳祖
光氏)。このあと日程の説明があり、
休憩、昼食。私たち(柴垣氏と小林)
のほか、杉野元子さんが出席、午後、
渝州賓館(重慶での私たちの宿舎)に
て休息。

22日(水) 8時半開始。座談会形式での討
論会。10時頃、平松圭子氏、布施直子
氏到着。約50名が出席、参加者それぞ
れ意見を述べる。

23日(木) 22日と同様、約50名の出席。平
松氏、〈老舍事典〉について紹介。

24日(金) 大足の石窟見学、大足賓館に泊
まる。

25日(土) 大足より北碚へ、北碚での老舍
故居参観(中国の先生方と合流)。午
後、中国の先生方は大足へ、私たちは
重慶見学。

26日(日) 午前、紅岩村を見学、午後、飛
行機で上海へ。

27日(月) 上海より大阪へ(小林康則記)

老舍資料近刊(6)

1987年追加

1. 舒济编『老舍幽默讽刺诗选』(小图书馆丛
书) 四川少年儿童出版社, 1987年

1988年追加

1. 刘章春「老舍遗作多幕剧《断魂枪》最近被发
现」北京晚报 6月19日 5版
2. 宋永毅『老舍与中国文化观念』学林出版社
7月 p.1~421
3. 林涵表「《茶馆》与《天下第一楼》随想」
北京晚报 8月17日 3版
4. 「《老舍的关坎与爱好》举行首发式」同上
8月24日 4版
5. 张小曼「丹柿小院」同上 9月5日 3版
6. 郝长海・吴怀斌编『老舍年谱』黄山书社
9月 p.1~258
7. 赵大年「戒烟」同上 10月12日 3版
8. 张嘉鼎「老舍称赞“葡萄张”」北京日报
10月26日 2版
9. 吴小美・魏绍华「老舍与东西方文化」中国
现代文学研究丛刊 第4期 11月 P.1~23
10. 史承钧・宋永毅「老舍研究的历史回顾(1928
~1976)」同上 p.220~244

11. 白岩「想起了老舍先生」北京晚报 12月7
日 3版

1989年

1. 王行之「我论老舍」文艺报 1月21日 3版
2. 「为纪念北平解放四十周年, 28日至30日人艺
在首都剧场由原班人马演出了话剧《茶馆》」
北京晚报 1月31日 4版
3. 「北京大碗茶商贸集团公司为老舍先生九十周
年诞辰民间举办纪念活动」北京日报・北京晚
报 2月2日 1版
4. 刘增林「老舍笔下的北京春节」北京晚报
2月8日 3版
5. 黄德华「忆老舍先生二事」同上 2月14日
3版
6. 于志恭「老舍一首未发表过的诗」同上 2月
15日 3版
7. 王大可「刘兰芳到“老舍茶馆”播书助兴」同
上 2月26日 5版
8. 松村茂樹「『小人物自述』に見える老舍の自
伝観」筑波中国文化論叢 9 2月 p.61~72
9. 「“老舍”茶馆将举办“先听为快”演唱会」
北京晚报 3月2日 4版
10. 魏喜奎「老舍茶馆兴曲艺」北京日报 3月
22日 3版
11. 「全国老舍学术会在渝召开」重庆日报 3
月22日 1・2版
12. 相原茂編「老舍 あゝ結婚(熱包子・婆婆
話)」朝日出版社 4月1日 p.1~59
13. 端木蕻良「老舍先生的收藏癖」燕都 第2
期 4月4日 p.24~25
14. 王行之「老舍的青少年时代(连载)」同上
p.26~27
15. 达城「是老舍笔下的茶馆吗?」北京日报
4月8日 2版
16. 靳飞「太平湖畔的一块铁碑」同上
17. 「纪念老舍先生诞辰九十周年」人民日报
(海) 4月15日 8版
18. 胡絮青「畫中的老舍作品」同上
19. 「老舍先生的收藏癖——摘自《燕都》第2期
端木蕻良文」人民日报(海) 4月27日 8版
20. 杉野元子「近代開化期を生きる二人の東洋文
学者・漱石と老舍の発期をめぐって——漱石
『坊っちゃん』と老舍『老張的哲学』」藝文研
究 第55号 p.244~269

老舍研究会会報第9号 (1989年7月10日)
〒464 名古屋市千種区不老町 名古屋大学文
学部中国文学研究室内 老舍研究会事務局
(TEL 052-781-5111 内線2245)